

ファラーシャと呼ばれた人々 —エチオピアのユダヤ人を追って—

山形 孝夫

1. ファラーシャ・移送作戦

エチオピアの首都アジス・アベバの陥落が目前に迫りつつあった1991年5月25日、その日のカイロ発外電は、エチオピアに住むファラーシャと呼ばれるユダヤ人集団が、あわただしくアジス・アベバを脱出し、イスラエル政府差し回しの特別機によって、テルアビブ空港に移送されたことを伝えていた（「朝日新聞」1991.5.26）。

特別機は12機。おおよわのピストン輸送の結果、短時日のうちに18,000人のユダヤ人がテルアビブへ移送された、という。

湾岸戦争のほとぼりのさめやらぬ動乱のさなかであった。このときすでに、エチオピア社会主義政権は事実上崩壊し、大統領メンギスツは行く方をくらましてしまっていた。ジャーナリズムはいっせいに、ユダヤ人移送作戦の見返りとして、エチオピアがイスラエルから受け取ったとされる巨額の軍事資金が、メンギスツの行く方とともに、どこかに消えてしまったことを書きたてていた。政府軍にとっても、反政府軍にとっても、もはや後の祭りの事件であった。

一方、テルアビブ空港に降りたったファラーシャの第1陣は、シャミル首相をはじめとするイスラエルの高官に迎えられ、長い長い苦難の末の祖国帰還が、今ようやく現実となったことを互いに確かめ合い、ともに抱き合って泣いたという。いわゆるソロモン・オペレーションの成功を伝える劇的な瞬間であった。

2. 同化教育センターにて

そのときから数えて2年目の春、私はかつてファラーシャと呼ばれた人々を追って、テルアビブからイスラエルに入り、彼らの居住区を訪ねて各地を移動して回った。

1993年の4月のはじめ。ユダヤの過ぎ越し祭り（ベサハ）が目の前に近づき、祭りの特別料理コシエルの広告が、連日新聞をにぎわせていた。日中の気温は、このところ勢よく上昇し、25度をこしている。海岸公園にでると、ケシの花によく似た野の花が一面に咲き乱れアイリスの花が紫や黄色のあでやかな色彩を強すぎる太陽のもとに競い合っていた。

季節は、ベサハを境に春から夏へ一足跳びに移りつつあるらしかった。

現在イスラエルには5万人にのぼるエチオピア系ユダヤ人がいるという。彼らの大量移送計画は1984年のモーセ・オペレーション、1985年のヨシユア・オペレーションとして展開され、今回のソロモン・オペレーションによって、ひとまず完了したと聞いている。テルアビブにある「統一エチオピア・ユダヤ人協会」のスタッフT氏の説明によると、彼らはイスラエル入国後「同化教育センター」（Absorption Center）に送られ、即席のヘブライ語と都市生活に必要なもろもろの知識を詰め込まれる。成人男子と女子には、自立のための職業訓練が不可欠である。それも同化センターの仕事であった。このようにして、すでに2万人をこ



ファラーシャ教育キャンプの簡易棟群

えるエチオピア系ユダヤ人が、同化教育を修了し、イスラエルの各地に巣だっていた。四散した彼らの行く方は、イスラエル全土にひろがり、その把握は不可能であるという……。

ところで、今回のソロモン・オペレーションによってイスラエル入国を果たしたエチオピア系ユダヤ人の居住先は、エルサレム地区、中央地区の他に、海岸線に沿って、南北に通じる自動車道路の両側に広い範囲にわたって点在していた。数え上げると、エルサレム地区に13ヶ所、約3,500人。中央地区に17ヶ所、約8,700人。海岸線の北部地域に15ヶ所、約8,700人。同じく南部地区に5ヶ所、約5,500人。総計26,400人という数になる。これらが、彼らのいう「同化教育センター」である。

私は、それらのひとつひとつを地図のうえに書きこみながら、短かい滞在の最初の作業をすすめていった。

ここでは、こうした作業をすすめる中で、私が訪れた数ヶ所のキャラバンを中心に、そこで出会ったエチオピア系ユダヤ人との面接記録を紹介することにしよう。テーマは、エチオピアの生活誌であるが、どうしてもエチオピア脱出という劇的経験が中心となる。なお、ガイド役を引き受けてくれたイスラエル人B氏は、1987年ヘブライ大学

東アジア学科を卒業後、1988年から1992年まで日本政府国費留学生として在日の経験をもつ。現在、テルアビブに住んでいる。

訪れたセンターは、テルアビブの北約20kmの町ナタニアの郊外の同化教育センター。約200棟の簡易ハウスに1,100人のエチオピア系ユダヤ人が家族ごと暮らしている。彼らの出身地は、すべてゴンダールとその周辺地域に集中している。

ここでは、28歳の独身男性Tの面接記録をとりあげる。Tも、例にもれずゴンダールに近いアコバル村の出身。1984年、モーセ・オペレーションによって、スーダンより移送され、同化教育の後自立するが、両親の救出のためにエチオピアに戻り、1991年のソロモン・オペレーションによってイスラエル再入国を果たした。現在、ナタニア町の役場職員として家族と一緒に同化センターのキャラバンで暮らしている。以下は、Tの語るエチオピア脱出物語の要約である。

3. 面接記録から

—1984年の9月、エチオピアのゴンダールからスーダンにむかって国境をこえた。若者も老人も女子供も含む大集団。約4週間かかって山を越え、谷を渡りスーダン領へ越境し、国際赤十字に

保護された。T自身は、家族と別れての単独越境だった。そのとき19歳であったTは、体力にまかせて、夜昼なく歩きどおしに歩き、1週間で越境した。越境は困難をきわめた。大方は食糧もつき、餓死する者や病人が続出した。

—スーダン国境へむかって行動を開始したのは、イスラエルによる救出作戦—モーセ・オペレーション—についての情報を伝え聞いたから。実母とは子供の頃に死別し、継母に育てられた。腹ちがいの弟や妹たちがたくさんいた。乳のみ子をかかえての越境は無理と判断して両親は断念し、結局Tは単独行動を決意した。

—スーダン領で保護された後、イスラエルの特別機でテルアビブに移送された。2万人が行動を起こし、約4千人が脱落し、死亡したと聞いている。とにかく決死の覚悟の脱出行であった。

—イスラエル入国後、集中キャンプに収容されてヘブライ語、英語それに職業訓練を受けた。訓練は、2、3年つづき、その間にヘブライ語を習得し、電機関係の職業につき、独立住宅に住むことができるようになった。その頃になって、Tはゴンダールに置きざりにしてきた家族のことがとても気になりはじめた。風の便りに、継母が病気であると聞いて、Tは矢も盾もたまらず、周囲の人々の押しとどめる手を振り切ってケニアに渡り、エチオピアに潜入した。ケニアでもエチオピアでも密入国者として逮捕されたが、Tはワイロを使って切り抜けた。アジス・アベバからゴン

ダールへむかい、故郷の村に辿りつく。3年がかりの命がけの旅だった。両親とめぐり合い、イスラエル行の決意を促した。湾岸戦争が燃えさかっている今が決行の時であった。ソロモン・オペレーションが、間近に迫っていることを両親も知っていた。この機会を逃せば、もはや永久にイスラエル入国の道は閉ざされるということも……。Tと両親は、一家を挙げて、アジス・アベバにむかって移動を開始した。1991年5月25日、イスラエル政府差し回しの1番機に乗り込み、テルアビブに到着した。

—エチオピアではキリスト教徒によって、たえず差別され、迫害されつづけてきた。ファラーシャとは、「どこから来たか素性の知れないもの」という差別用語。T自身は決してその呼称を使わない。Tをはじめ、彼の仲間が使用する呼称は、ベータ・イスラエル (Beta Israel)。昔からその呼称に誇りをいだいて用いてきたという。

—学校は公教育であるが、ユダヤ人の土曜安息日の慣習を学校は認めようとはしなかった。結局、ユダヤ人は欠席した。嫌がらせに耐えながらの欠席であった。嫌がらせは、数え挙げたら際限がない。たとえば市日。以前は火曜日であった。それが、土曜日に移され、ユダヤ人は市場から閉めだされた。こうした迫害に耐えきれず、キリスト教徒に転向するものも随分いたが、その場合でも、「ファラーシ・ムーラ」と呼ばれて蔑視された。それでもあえて転向したのは、キリスト教徒



ヘブライ語学習校からバスで下校するファラーシャの子供たち

になれば農地を入手することができたからである。ユダヤ人は、完全に土地所有から閉めだされていた。このような制度の強制のもとに、一方的な仕方ですべての権利を奪われたままに、ベータ・イスラエルとしての自覚を保持し続けてきた。

—彼らが先祖伝来うけついできたユダヤ教は、タルムード以前の、もっと古層に属する、もっとも古式のユダヤ教であった。そのことを知らないヨーロッパや東欧のユダヤ教徒は、そのために彼ら

を異端扱いした。憐れみをこめてブラック・ジュと呼ばれたこともある。しかし、現在にははっきり認定されている。学問的な検証にも耐えて、正統ユダヤ教徒としてユダヤ教の機関によって認知をうけた。その結果として、今、イスラエル国にいる。

—Tはこう言う。ユダヤ人であることとユダヤ教徒であることはひとつに結びついている。わたしたちには、先祖から受け継いできたユダヤ教徒としての魂がある。これがあるから、どんな苦しみにも耐えることができたのだ。死の恐怖と

戦いながら、スーダンにむかって越境することができたのだ。どのような苦難に耐えたか、どのような辛抱をして、この国へ来たか。恥ずべきこともした。それは筆舌につくしがたい・・・と。

4. B氏との対話

Tの語るエチオピア脱出物語は、それ自体が驚異であった。私は、胸をつきあげられるような想いをもって彼の語るファラーシャと呼ばれた人々の物語を聞き終えたのだった。

しかし、あらためて考えてみると、もしもユダヤ人であるならば、これに類する、あるいはこれ以上の命がけの脱出行の経験をもたないものはおそらくないのではないかとも思った。

テルアビブのホテルへの帰路、夕方の車のラッシュの中をガイドのB氏と歩きながら、少しあらたまってユダヤ人である彼にインタビューの感慨を求めた。

「たしかにね、お前の言うとおりのユダヤ人であればね、ほとんど誰でもその程度の経験はもっているさ。親戚の誰かは、必ず殺されているからね。それが普通なんだ・・・」

—それにしても、ファラーシャの物語を聞きながら、ユダヤ人とは何者なのか、すっかり考え込んでしまったなあ・・・。

Bは少し押し黙っていたが、きっぱりと言った。「それは、はっきりしているんだ。絶対に髪



筆者と面接したファラーシャの若者。向かって左がT氏

の色でもなければ皮膚の色や顔の形でもない。場合によっては血でさえない・・・。結論的な言い方をすれば、自分はユダヤ人だという自意識しかないのだろうね。彼らはファラーシャとよばれて差別されてきた・・・。しかし、ベータ・イスラエルとして生きてきた。絶対に改宗しようとはしなかった。改宗することは、魂を売り渡すようなもんだからね。そこがファラーシ・ムーラとは違う。決定的に違う・・・。それからもうひとつ。ユダヤ人であるという自意識とユダヤ教徒であることは、ひとつになっている・・・。僕らはそのように確信している・・・。それが崩れたら・・・」

そこまで言ってBは静かにあとの言葉を飲み込んだ。私は催促した。あとにつづく言葉をここで立ち消えさせるわけにはいかない。

—それが崩れたら、どうなるの・・・。

「それが崩れたら、・・・イスラエル国家は崩壊する・・・」

Bはそう言うと、はじめて人懐っこい顔をみせて笑った。イスラエルという国が、余りにも人工的にすぎる国民国家観と、余りにも幻想的にすぎる失われたユダヤの魂の故郷という観念との、いわばぎりぎりのきわどい線の上に成立しているという議論を、それから私達はビールを飲みながらしばらく続けて別れた。

(やまがた たかお 宮城学院女子大学)